

日本人はいつからアーティストと名乗り始めたか

そのあたりを歩いている若者に、「今、美術界で活躍している日本人アーティストを十人挙げてください」と尋ねたら、何人答えられるだろうか。十人スラスラ挙げられる人は百人に一人、いやもしかしたら千人に一人くらいのもものかもしれない。美大の学生でも全答は少ないと思われる。そう有名でもない自分の先生の名前を入れて、やっそこさ十人というところだろう。残念なことと言わなければならないが、それは当然と言わなければならない。音楽のアーティストなら挙げられても、美術となるとちょっと難しくなるのだ。

「アート」という言葉は普通、美術を指して使われている。美術畑の人にとって「アーティスト」と言えば、当然美術のアーティストのことだ。だから時には、こんなすれ違いも起こる。「アーティストってさあ、やっぱり究極的にはオリジナリティだと思ってる」

「そうだよね。作詞すりゃ何でもいいってもんじゃない」  
「俺、アートの話してんだけど」

「え、てつきりJ・POPのアーティストのことだと……」

「なわけねえだろ、アーティストって言ったらアートのほうに決まってるだろが！」

(まあここまで極端なことばかりではないと思うが)

美術畑でアーティストを自認する人が、自分を浜崎あゆみと同格だと思っていることはまずない。たとえ世間的知名度や収入で圧倒的に負けていても、「本来のアーティスト(芸術家)はこっちであって、比べる方がおかしい」と思っている(はずだ)。そう、アート⇨美術こそは芸術の代表格。レオナルド・ダ・ヴィンチを見よ。アンディ・ウォーホルを見よ。アーティストは常に、時代の最先端に立ってきたではないか。美術畑の人がバイトしながら売れない作品を作っていたとしても、職業を聞かれて「アーティストです」と誇らしげに答える時、そういう先達の栄光が瞬間的に頭の中をよぎっている(はずだ)。

とはいえ、日本の美術界では、皆最初から堂々とアーティストを名乗り、呼ばれていたのかという点、そういうわけではなかった。アーティスト⇨芸術家、美術家であることはもちろん承知しているながらも、誰もが普通にアーティストと名乗るようになったのは、比較的最近のことである。ではいつ頃「アーティスト」という言葉が登場し、どんなふうに着着していったのだろうか。「アーティスト」以前と「アーティスト」以後で、何がどう変化したのだろうか。それを、かつて美術畑にいた者の目から、周辺の出来事や当時の雰囲気を読み出して書いてみようと思う。

アーティストはもともと「芸術家」と言われていた。お父さんが絵描きでお母さんがピアノ